

### 同窓諸賢、近況を一筆啓上。不要は黙殺。

英語学科長 草深 武

赤き帽 道切れるわたり 秋も暮れ  
艶治なものを暫し追慕、かと思えば  
木戸や指す 待つ人もなく 日の暮るる

諦念の想い口元漏るる小生、命数ばかりは恩師を凌ぐ破目になりました。

昨今は後輩教員の「ピント外れ無用、停める可し」と御親切な忠告。既成知識の促成に支配される英語学科生には、数百頁の英学術書を読むなぞ愚の骨頂。小生の講議は受講生過少・閉鎖続出。英国留学時に見たサッチャー政権下の不急な講座の閉鎖を自ら体験しています。

ピント外れか知らぬが我が道を行くのみ。授業予習の合い間、ライデン大学留学時に入手のマイクロフィルム、1579年出版の新教徒の抵抗理論 *Vindicatio Contra Tyrannos* を、元哲学科教授の指導下に取り組み進めています。数年前に授業で *Foundations of Modern Political Thought* を読んだ際に触発されたもの。屈指の政治思想家スキナーもどこまでこのラテン語原典に当たったものやら。古典文献と聖書を自在に駆使して偽政者と専制君主を正確に区分、後者への抵抗権確立に努めた本書は正しく近代西欧社会が創出の「人権」神話、又その神話に根ざす民主主義の幻想原図を抽出して妙。蘭仏で相次いだ国家指導者暗殺、英国王の処刑、そしてクロムウェル自身への暗殺扇動の書 *Killing is No Murder* 等、君主弑逆の理論の根拠と同時に、健全な市民的不従順の原点と位置づけられもします。

年来の研究分野、再洗礼派運動と無縁でない *Vindicatio* と別様に小生を魅するのが臼井吉見の「安曇野」です。新宿中村屋の創業者相馬夫婦を中心に、近代的社会思想が右翼思想に屈折してゆく経緯をこれ程描き切った作家を知りません。内村鑑三の弟子で、安曇野研成義塾にて人間教育に献身した井口喜源治。その教え子で真の自由主義喧伝を期待されつつ病没した清沢洌。松本中学卒業者中ピント外れ最大級の木下尚江と唐木順三。尚江の尊師田中正造。友人大杉栄と栄を巡る女達。中村屋娘婿ビハリ・ボースを介してのインド独立運動と軍への接触等々、話は日本近代史を取り込みます。就中小生を魅了したのが石川三四郎。大逆事件を一早く脱皮し欧州で組合主義を通じ真のアナキズムを悟った三四郎には Blake の *Everlasting Gospel* や安藤昌益の自然真営道に通づる生命の原理が漲っています。ピント外れの小生、早く退職し、猫額の地を耕しつつ読書三昧の傍ら子供相手の寺子屋爺を夢見る今日。冥境の恩師噴飯確実。

諸賢の御多幸を祈りつつ擱筆。

敬具

## 『英語学科のみなさま』

渡邊（旧姓・小町谷）昭子（昭和55年卒）



二〇〇五年九月二十五日に閉幕した愛知万博に、もし足を運んでいただけた方がいらっしゃるとしたらこの場を借りて心から御礼申しあげます。知名度はあまりなかったかもしれませんが、地元の愛知県では大変熱狂的な盛り上がりで、地方自治体のみならずグラスルーツレベルの国際交流が展開されていました。私もナショナルデーという国家単位でおこなわれるVIPの皆様が参加される午餐会の席で通訳業務を担当し国の名前さえ知らなかったような小さな国から、よくニュースに出てくる大国まで、本当に様々さまざまな方々と触れあい、食事の場で交わされる会話とはどれほど多岐にわたるものであるかに驚かされました。また一方では初めて市民参加が認められた万博でしたので、市民プロジェクトに関わる仕事もあり、そこでさまざまな志のある市民グループのみなさんの活動を知り、想像を越える市民のパワーを実感しました。60日ほど万博会場に通いましたが、良い思い出となりました。

二〇〇五年は、私達夫婦にとって、銀祝記念の年でもありました。五月に四ッ谷キャンパスで昔のなつかしい友人たちと会えたことも大きな喜びでした。パーティーの席では、当時学長でいらっしゃったヨゼフ・ピタウ神父の声も聞くことができ、感動致しました。

上智大学で学んだ頃、心の奥に芽ばえていた「世界に向ける目と心」を、三人の子育てをしながらも持ち続けおそまきながらも通訳という天職にたどりつけた今、御指導いただいた大学のすべての先生にあらためて感謝しております。人と人とのあいだでコミュニケーションの場をととのえる仕事は、今までの人生経験があってこそできる天からいただいたギフトだと思い、大切にしたいとしみじみ思う毎日です。

# 『あれから10年』

林 めぐみ(平成13年卒)



この週末、近所のショッピングセンターへ買い物に行くと、売り場のあちこちに「新生活応援フェア」の貼紙がありました。「今年もまた、新しい春がやってきたなあ。」と見回すと、家電売り場で40-50代の男性が小さめの冷蔵庫の説明を店員から聞いていました。そして、彼らの横に不安げな面持ちで立つ若い男性。「きっと近所の大学に入学する新生徒だな。」そう思うと、ちょうど10年前の自分の姿を重ね合わせました。

1996年4月3日。18歳の私は、母と二人、東京駅のホームに入ろうとする東海道新幹線の窓から外を眺めていました。東京には受験で何度か来ていたけれど、「今回は帰りの切符は買わないのだ。」と思うと、とても心もとなく感じました。その後2日間は入学式に出席したり、新生活の準備をしたりと忙しく過ごしましたが、すべて落ち着き、母が郷里へ帰っていった夜、寂しさのあまり、公衆電話から涙声で家に電話したことを思い出します(当時は、まだケータイやメールはそれほど一般的ではありませんでした)。

この4月であれから10年。今では、なんとか学校も卒業し、都心でOLとして働く毎日。習い事をしたり、友達と出かけたりと楽しい日々ではありますが、一方でつい目先にばかり気をとられ、あの頃確かに持っていた初々しさや夢などというものをとすると簡単に忘れてしまいそうになります。節目となる今年は、是非またあの頃を思い出して、一日一日をいとおしみながら過ごしていきたいと考えています。そして、時間が空いた時には再び母校を訪れてもみたいと思います。

# 丹野先生の学科長日記

## 2006年1月2日(月)「英語学科カリキュラム：その1」

今日から英語学科のカリキュラムを、何回かに分けて紹介しましょう。現在の状況と事実を客観的に述べるに留めます。皆様が学んだ時と比較して、ご一考いただければ幸いです。

1年次必修科目：イングリッシュ・スキルズI（4単位） 英米文化入門（4単位） 英作文I（2単位）

2年次必修科目：イングリッシュ・スキルズII（4単位） 英作文II（2単位）

リスニング・コンプリヘンション・テスト（英語聴力のみを点数化）の点数に従い、上位からA, B, C, D、後は全く無差別にE, F, G, Hのグループに便宜上分け、1クラス（学生はクラスと呼びますが単なる集団で、正式には別の分け方で4クラスが存在）20～25名（英米文化入門は2グループ合同）で、専任及び嘱託の英語を母国語とする教員及び限りなくバイリンガルに近い日本人専任及び嘱託教員が担当。共通テキストや系統的枠組みはありませんが、各教員の英語教育に対する熱意、使命感、責任感、独創性によって授業が行われます。これら16単位こそ英語学科の最重要中核科目だと主張する者、科目や単位数を減じ教員と学生の負担を軽減すべきと提言する者がいるように、教員の考え方は多種多様で現在に至っています。語学学習に使命感を持つ外国人の先生方のいわば聖域なので、改革の要不要はお任せしています。英語力向上や、グループの連帯感及び友人関係強化に貢献度大と評価する学生、クラス指定制度、課題量の多さ、内容等に不満をもつ学生（万人に満足を与えるのは神業に等し）がいます。様々な学生の声を直接、間接耳にしますが、聞くに留めておくのが現状。とりわけ新入生にとっては、昔のニッセル英語、プス英語に相当する、インパクトの強い科目群です。

## 2006年1月3日(火)「英語学科カリキュラム：その2」

1) 英文講読：日本人専任教員による英文読解授業。昔は「英語学」と言われ、1年次リーダーズ・ダイジェスト、2年次ニューズウィーク誌をテキストに、3, 4年次も「文献講読」（テキストは担当教員によって違う）と言う名のもとに4クラス指定必修科目でした。後、1, 3, 4年次の必修は廃止。現在、2年次に、アメ研、イギリス・英語圏研、言語・コミュニケーション研の3分野から2科目ずつ6科目提供されている中から1科目（4単位）を選択必修。

3分野の英文書籍、雑誌、論文、文献等の読解力養成を主眼とし、あくまでも英語学習科目ですが、学問的知識背景も同時に学ぶことが目的の科目でもあります。1クラス30人前後に設定されていますが、選択制なので各科目の受講生数のバラツキや偏りが、毎年問題になります。スキルズ、英作文と同様、共通の教育プログラムがなく、各教員が独自に授業。学生の各科目選択の動機・目的も多様。

2) 3・4次英語科目：10数年前外国語学部で、「語学教育から地域研究へ」の潮流が生まれた折、英語学科でも語学科目を削減し専門科目 充実の動きが優勢でした。結果、3, 4年になると全く英語学習をせずに卒業する学生が増えては困るので、英語科目8単位を必修にするため設けられた科目です。上級の英会話、作文、和英訳、ディベート、スピーチ等10数科目を提供。担当教員数が増減したり、科

目選択制なのでクラス人数のバラツキが常に発生。又、海外留学生の殆んどは、帰国後これらを外国で取得した科目に単位換算後振り換えます。

以上、現在英語学科では、卒業に要する124単位中、必修16単位、選択必修12単位の合計28単位が英語科目となっているのです。極端ではありますが、英語科目とそれを担当希望の教員はすべて一般外国語教育センターに移行するのが理想的だ、という意見があります。もう一方の極端な例は、英語科目こそ英語学科の要であり、専門分野科目やそれらを担当する教員より優先されるべきだ、という主張があります。

## 2006年1月4(水)「英語学科カリキュラム：その3」

1・2年次選択科目：10数年前、学科カリキュラムの大改革が行われました。語学科目を基礎に、副専攻の国際関係、アジア研、言語を取り込んで、アメ研、英国・英語圏研の5本柱を専門研究とする履修大綱が完成。これによって、学科のアイデンティティーをより明確なものにしたのです。学科で提供出来る科目群は、前記5つの内3番目からの3つです。どのような勉強をするのか概観する目的で、これら3分野の入門科目を8単位以上修得することが義務付けられています。教授は専任又は嘱託で、各分野の専門家が担当することになっています。科目数は、担当教員の事情等により毎年増減があります。

3・4年次選択科目：3,4年次、英語に全く接する機会がなくなってしまうと言う弊害から、数年前から英語による専門科目の講義として学科が提供する前記3分野の科目。又この科目群には、比較文化学部(2006年度から国際教養学部として新規発足)の20数科目も含まれています。比文の科目を履修する事で、国内留学の醍醐味も味わえるという特典のもとに、クロス・リスティングが可能となりました。但し、受講するにはTOEFLの点数の規定を満たしていなければなりません。教授陣は、ネイティブ及び彼らと同等の英語力を有する学科専任教員(嘱託、非常勤もありえる)です。

将来的には、これらの科目はすべて英語で講義されるのが理想的だ、という意見がある反面、天下の英語学科といえども、専門的学識が高い日本人教員が、日本語で行う講義があってもいいのではないかと、いう考えもあります。

# 丹野先生の<sup>①</sup>学科長日記

## 2006年1月5日(木)「英語学科カリキュラム：その4」

専門分野科目(3・4年次選択科目、副専攻科目を含む)：英語学科では既に5本柱によるカリキュラム体制が確立していましたが、数年前から外国語学部全体の改革運動が始まりました。当初は、学科の枠を取り払って語学教育を除く専門は、すべてボーダーレスにするという構想もありました。しかし結局、学科の存在は堅持する形で、専門分野制が昨年成立したのです。それぞれの学科は、語学科目の上に7つの専門分野を設け、所定の研究科目16単位を履修し、ゼミと卒業研究を修めれば、履修証明書を学部で出すという制度です。

英語学科は、1)英語研究 2)アメリカ研究 3)英国・英語圏研究 4)ヨーロッパ研究 5)言語研究 6)国際関係研究 7)アジア文化研究となります。英語学科では、この改革に反対あるいはあまり関心のない教員が多かったことは事実です。皮肉な事に、改革は英語学科の制度を模範にして作られたのです。もともとアメリカ、英国・英語圏研究を専門にする教員の数は著しく少ないという現実があります。5～7は、副専攻が担当。1～3は英語学科、4も英語学科が一部の科目を提供します。現在、各分野の科目は数の上でも内容的にも他学科に比して充実していますが、この2、3年で教員の退職等による入れ替わり次第では、大きな変化が起きることが予想されます。

いずれにせよ、来年度の学部新2年生は全員、7専門分野中1つを選択し、学科事務室で登録することになります。

---

## 2006年1月6日(金)「英語学科カリキュラム：その5」

アメリカ研究科目の行方：今を去ること15、6年前、ニッセルさんの一声で、英語学科では既存科目を整理、新設科目を加えてアメリカ研究の体系的なカリキュラムを作りました。当時学部内では、未だ地域研究についての問題意識はそれ程高くはありませんでした。アメリカ人の専任教員(SJの聖職者が多かった)と学問研究でアメリカに関わる日本人専任教員が中心になり、囑託、非常勤教員の助けも得て、歴史学を中核とした人文・社会科学系の科目を幅広く学生に提供できるようになりました。勿論、担当専任教員すべてがアメリカ研究の専門家とはいえません。受験生や英語学科生の大多数がアメリカ研究に興味のあるというわけでもありません。しかし、小規模ながらも、学生の求めと要求に応えるべく、信頼性のある質の高いアメリカ研究の専門教員とカリキュラムを、今後育てていく必要に迫られています。

バイリンガル教育の専門家現学部長の吉田研作さんが、英語学科アメリカ研究の行方について憂慮されています。一方皮肉な事に、アメリカ人教員の間でそのような気配は感じられません。同様のことが、英国・英語圏研究についても言えるのです。

実は、立場上極めて書き辛いことを敢えて書いてしまいました。自己韜晦に満ちた文章になってしまいましたが、皆様はこの現状を一考していただければ幸いです。

## 2006年1月7日(土)「英語学科カリキュラム：その6」

今後の展望：門外漢が述べる資格はありませんが、英語学科の言語学系統の専門教員とカリキュラムは充実しています。大学院と結びつき、英語教授法、バイリンガル教育、異文化コミュニケーション等、一流の教授による教育研究が、現在そして将来にわたっても行われることでしょう。学生時代、ニッセル、フォース、ポルドー各先生の英語やパリー先生の日本文学英訳の英作文は、確かに大きな影響を与えました。しかし、当時初めて知ったJ・S・ミル(岸村先生) N・ヴェルジャーエフ、M・ブーバー、T・S・エリオット、S・ヴェユ(野口先生) D・リースマン(羽鳥先生) C・ディッケンズ(小稲先生) 実存主義哲学者(エヴァレット先生)も、英語学科にいたからこそ邂逅出来たのでした。吉田先生を始めとして、英語学科で学んだ言語学専門の教員の方々も、直接英語とは関係ない人文科学系の科目の必要性をしっかりと認識しているのです。

英国・英語圏研究には、野口先生のような講義をする教員と科目が必要だと思います。たとえ受講生数が学科全体の1%程度でも。

アメリカ研究に関して、胡散臭い反米・嫌米イデオロギーが漂っているのでしょうか。アメリカ研究の言葉を発すると、どこからともなく冷たい風を感じるの、私の単なる病的強迫観念からなののでしょうか。歴史学を中心に据えたアメリカ研究の充実と発展のためには、しっかりとした後継者を迎えて育てていかなければなりません。現在アメリカ文学を専門とする専任日本人教員は、器量不足です。この数年の間に、米国史と米文学関連の魅力ある専門家を中心に、堅固な太い鉄筋入りの「アメリカ研究」の館を建設する事が急務です。

今後は、必修英語科目担当教員の穴を埋めるために、とりあえずアメリカ人の英語講師を採用するという愚挙だけは避けなければなりません。

---

## 2006年1月8日(日)「英語学科の常識」

外国語学部の中で、英語学科は特異な存在です。皆様お分かりのように、他学科に比べて圧倒的に教員と学生の人数が多く、一学部の規模に匹敵します。スーパー否、百貨店のように科目の品数も豊富です。9、11、1、2月の入試には、他学科とは比べられないほど多数の志願者が応募します。オープンキャンパスでは、学科のブースはいつも受験生でいっぱいです。日本の若者の多くは、今でも英語コンプレックスなのです。私達教員は恵比須顔です。泥舟が沈みかけているというのに。英語学科というコージーな蛸壺から外へ出てみると、哀れ皆裸の王様です。総務担当理事にお会いすると、「英語学科はドル箱だからね」と仰せられます。元来非社交的で社会性の欠ける私奴も、学科長という職責上様々な集まりに出席しました。学科教員は学科内のパーティーには喜んで参加します。しかし学部や全学的な集まりにはあまり出席しないという風評があります。学内の人と話してよく言われることは、「やっぱり英語学科だね」という一言。それは時に強大なものに対する脅威と羨望が複雑に絡み合った感情の発露であり、しばしば「そんなことアリなの？」という驚嘆と侮りの表明でもあることがわかりました。英語学科の常識は、上智大学の非常識なののでしょうか？

# 丹野先生の学科長日記

## 2006年1月23日(月)「期末試験期間」

今日は、キャンパスを行き交う学生の数がめっきり減りました。2号館9階には、教員に面会やレポート提出のために訪れる学生の姿が目立ちます。午後から図書館で、試験問題の最終校正。その後、研究室で卒業翻訳のチェック。将来立派な翻訳家になる素質十分な学生ばかりです。迎賓館庭園は、週末の雪で白く輝いています。六本木バベルの塔が、淡紫色の夕空に黒い影のように屹立。程なく暗い夜空に燦然と輝いていました。

## 2006年1月25日(水)「英語学科昼食会」

昨年4月から、和泉さんを座長に、若手教員が月1回程度昼食会を開いています。単なる親睦会ではありません。スキルズ、英作文、その他上級英語科目の内容、教授法、授業内容等についてブレインストーミングを行っているのです。皆さん、それぞれ専門の研究、講義に携わりながら、学生の語学学習のために粉骨細心努力していることも、お伝えしたいと思いました。

## 2006年2月10日(金)「採点表提出締切日」

今日は、学生のレポート提出締め切り日と同じ焦燥感を味わうことになりました。丸一日半部屋にこもって、一気呵成にチェック採点してしまえばよいものを、遂に七日もかかってしまいました。それに、一人一人学生の顔が心に浮かぶと、評点するまで煩悶するのです。全員Aにするわけにもいかず、やがて胃液が分泌過剰になり食欲不振に陥ります。Fは仕方ないとして、B、Cをつけた諸君、どうかお赦しあれ！

## 2006年3月15日(水)「月づくし」

帰路夜空を見上げると、見事な月が煌々と輝いています。今日は満月？そこで、"Moonlight and Roses" 昔の思い出がよみがえります。でもあれは単なる幻想。"It's Only a Paper Moon" 明日に仄かな希望の光が。"There's a New Moon Over My Shoulder"

そして、"When My Blue Moon Turns to Gold Again"すべて「善し」と言える時が来ます。それでもやはり、輝きを失った"Dark Moon"淋しげな"Blue Moon"を愛し続けるでしょう。

## 2006年3月22日(水)「壮行会」

今日は昼食時、英語学科壮行会を開催。

楠瀬淳三さんは、1969年来勤続37年。その間科長を2期勤められ、学科のために尽力されました。山登り、歩行が大の趣味。2号館9階まで歩いて上る仲間を一人失うことになりました。

菅原勉さんは、1970年から上智に奉職。学科だけではなく、学生部長、副学長、学事部長、公開学習センター長として大学全体のためにも献身されました。体力、気迫抜群。若い人材を大学は喪失します。

マーガレット・ダイヤーさんは、かつての日本人女性の美徳を全て備えた大和撫子。

しかし心の中には燃えるような情熱を秘めた若い教育研究者。新生活のため、残念ながらアメリカへ帰国されます。

そして、学科事務室と学部長室で勤務された、相澤磨美さん('85年外英卒)。大学には是非戻ってきてください。皆様、末永いご健康と更なるご活躍をお祈り申し上げます。

### オール・ソフィアンズ・デーで会いましょう 2006年度 SELDAA 総会&懇親会のお知らせ

2006年度総会を今年もオール・ソフィアンズ・デーに合わせて、5月28日(日)に開催します。

総会では、活動報告、議案の承認の他、SELDAAの今後の活動について、多くの方のご意見を伺いたいと思います。

総会終了後には、ささやかながら親睦パーティーを予定しております。会費は無料。是非皆様お誘い合わせの上お越しください。久しぶりの母校で、楽しいひとときを過ごしましょう。

---

2006年度 SELDAA 総会および懇親会

日時：2004年5月28日(日) 12:00 ~ 14:00

場所：1号館305教室

---

## 卒業生短信

3月上旬までに事務局に届いたお便りを掲載いたします。(本文中では敬称を略しております。ご了承ください。)皆様からのお便りを募集しております。ご自身の近況、自著の宣伝等、なんでも結構です。同封の葉書に書いて、同窓会事務局までお送りください。

2005年8月に最初の学著『妖精のアイランドー  
チェンジリング』の文学史』(平凡社親書)を出しました。ご高覧下さい。来年度からIASIL JAPAN(国際アイランド文学研究協会日本支部)の事務局を仰せつかりました。アイランドにラインがあるみなさまどうぞご協力、いえどうかお助け下さい。よろしくお願いいたします。

**下楠 昌哉**(平成3年卒)

今年から再び新しい職場となり、卒業以来6つ目の仕事となります。併せて、4月には都内に転居し、念願の自転車通勤を始めました。ASFの実行委やスペシャルオリンピックソフィア会の活動に参加してちょくちょく四ツ谷のキャンパスにも出没しております。息子がイグナチオの日曜学校に通い始めたので、毎週お隣の敷地には必ず出向いています。

先日は、ピタウ先生の会に出席し、お元気な姿に接することが出来て、懐かしく、また嬉しく思いました。

**辻 政弘**(昭和59年卒)

若い皆さまががんばって英語学科だけの会報をおつくりになり毎度読ませて頂き、有難く思っております。私も40年余りビジネスの世界で働き、会社経営も十分にやり、この3年間は余生の生活に入りましたが故郷「四万十川」地方の地域興しを依頼されこの3年間毎月国に帰りボランティアで地元の人々に教えております。(事業経営について)数年前故郷の高校を訪問した時、若い英語の女先生に会い、何と上智の外英卒で、SELDAAも随分手伝ったと聞きうれしく思った事がありました。今回、世界に活躍の場が広がり、結構なことです。時間があれば四万十川にもぜひいらしてください。

**佐竹 章夫**(昭和35年卒)

Sophians club 閉鎖最後の月、12月15日に37年卒のESS同期生が集います。

もうみんなretiredしていますので、ゆっくり楽しい時間が過ごせる当日を楽しみにしています。

**龍田 信徳**(昭和37年卒)

漆原さんと同級生でした。「卒業生便り」大変おもしろかったです！(笑)さすがは漆原さんでした。私は3年前に教員を辞め、占い師・整体師になりました。

(HP <http://www.kaifukuya.com>)

このたび「教師になったら読む本」をHon's penguin社から出版しました。(筆名を使っています)

(HP <http://e-penguin.net>)  
あと2冊、書いているのですが、1冊は同じHon's ペンギンから出しますがもう1冊、出版社を探しています。

もし、お知り合いにいらっしゃったらご紹介下されば幸いに存じます。

**大山(旧姓片山)ますみ**(昭和59年卒)

元気です。

お陰さまで。

上智大学、ありがたうございます。

**山田 五郎**(昭和39年卒)

## 上智学院100周年事業について

従来、SELDAは上智ソフィア会の協力は得ながらも、組織としての有機的なつながりはありませんでした。この度、SELDAはソフィア会と正式な手続きを完了して個人情報の管理・共有ができるようになりました。同窓会としては、今後、さらにソフィア会との連携を深めていきたいと思っております。つきましては、会員の皆様には昨年秋に大学から「上智学院100周年記念事業募金」の趣意書が届いたと思いますが、下記のごとく、ソフィア会が小額でも受け付ける口座を開設しました。皆様のご協力をお願いします。

### 上智大学ソフィア会募金委員会からのお願い

上智大学ソフィア会では、上智大学創立100周年記念募金に積極的に協力するために、1万円未満の金額でも気軽に募金していただける口座を独自に設けました。ご入金いただいたお金は、総額が10万円以上になる度に、ご協力いただいた方々のお名前と共に、責任を持って上智学院財務局募金室に届けます。恐縮ですが、振込手数料はご負担をお願いします。なお、1万円以上振り込まれた場合は、上智学院より証明書が発行され免税措置が受けられます。是非、母校の将来のためにご協力をよろしくお願い申し上げます。

#### <お振込先>

**郵便振替**0013-8-483122「100周年募金ソフィア会口座」

郵便局から郵便振替で送金される場合は、払込人の住所・氏名・電話の記入欄にもれなくご記入の上、通信欄に「卒年・学部学科」をご記入ください。

**銀行振込** 三井住友銀行 麹町支店(店番号 218)

**普通預金口座** 8792914「100周年募金ソフィア会口座」

銀行からのお振込の場合は、「お名前・ご住所・お電話・卒年・学部学科・お振込額・お振込日」を郵便・FAX・メールのいずれかでソフィア会事務局までお知らせください。

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学ソフィア会内

E-mail:sophiabokin@sophiakai.gr.jp

電話 03(3238)3041 FAX.03(3238)3028

上智大学ソフィア会募金委員会

委員長 本多義人(ソフィア会会長)

座長 和泉法夫(ソフィア会副会長)

委員 細川佳代子、大河原毅(ソフィア会副会長) 戸川宏一、劔持睦子、秋元征紘、槇原尚樹、師岡文男、阿部修平、三溝真季、宮城信夫、高橋喜代子、今井雅人、矢野祥子(ソフィア会常任理事)

## SELDAのホームページについて

英語学科同窓会が設立されたのは1983年。そして、今や、英語学科の卒業生は7500名を越えています。ホームページは2004年5月にリニューアルしました。「知らないなんてもったいない」をキーワードに、会員に対して同窓生の動向や英語学科の様子などのタイムリーな発信に努めています。まだご覧になっていない方は、是非覗いてみて下さい(<http://seldaa.net>)。20年以上に亘り毎年2回発行している第一号から最新号の会報誌までの全ページを閲覧することもできます。会員間の交流に、そして、情報収集のツールとしてご利用ください。

## 会員の皆様へのお願い

上智大学英語学科同窓会(SELDA)の個人情報管理について同意いただけるかどうか、ご確認をお願いいたします。

SELDAでは、昨年4月からの個人情報保護法施行に伴い、SELDA会員の個人情報の管理にこれまで以上に慎重に対応しております。そのガイドラインについては、会報誌第41号でご報告し、SELDAホームページ(<http://seldaa.net>)上でもご報告しておりますので、会員の皆様には内容をご覧いただきご確認をお願いいたします。このガイドラインの内容に同意されない場合はSELDA事務局までお申し出ください。それぞれに対応させていただきます。

## 住所変更の通知にご協力ください

ご住所、勤務先などに変更があった方、名簿の誤りを訂正される方、お名前の正しい読み方を知らせてくださる方は、英語学科同窓会事務局またはソフィア会事務局までお知らせください。事務局でいただいた変更通知は、「個人情報保護法」を尊重し必要な手続きの上、ソフィア会事務局にも通知します。

住所不明の方が多数いらっしゃいます。消息をご存知の方、情報をお寄せください。お友達で会報が届いていないという方がいらっしゃいましたら、是非事務局までご一報ください。

また、最近は市町村合併などによる住所の変更が多くなっております。是非最新の住所、電話番号等をお知らせください。

住所・勤務先の変更等は、同封の葉書をお使いいただくか、SELDAAのホームページの「住所・勤務先変更フォーム」([http://seldaa.net/about/change\\_form.html](http://seldaa.net/about/change_form.html))から送ってください。

## SELDAA より、募集とお知らせ

SELDAAでは、皆様よりこの会報に載せる記事を募集しています。近況や最近感じたことなど、何でも結構です。書式は自由ですので、同窓会事務局宛にどしどしお送りください(写真も大歓迎)。

この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。ボランティアで私達と一緒に会を盛り上げてくださる方、ご連絡をお待ちしています。

上記に関するご応募・お問い合わせはこちらまで。

連絡先: 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学英語学科事務室気付 上智大学英語学科同窓会事務局  
FAX.03-3238-3910 E-mail:info@seldaa.net  
(Faxは、英語学科同窓会宛を明記してください。)

## 会費納入のお知らせ

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費の納入によって賄われています。同窓会活動のより一層の充実と活性化を図るために、ぜひ会費をお支払い下さいますようお願い申し上げます。

会費の支払方法には、毎年会費を支払う「一般会員」と、一括払いの「終身会員」の2通りがあります。初めて会費をお支払いになる際には入会金も合わせてお支払い願います。金額は下記の通りです。同封の振替用紙にて最寄りの郵便局または銀行よりお支払いください。その際、ソフィア会会員番号を必ずご記入ください。

<b>入会金</b> : 1,000円
<b>一般会員</b> : 年会費 2,000円 (できれば3年分まとめて)
<b>終身会員</b> : 一括払い 20,000円

## あなたの会費納入状況

今回の会報の別ページで報告してありますように、昭和32年から平成18年までの英語学科卒業生7,506名の会員データをコンピュータ化しました。それに伴い、会員の納入状況をより明確にお伝えすることができるようになりました。封筒の宛名ラベル右上にある日にち、例えば、「2006年3月31日(2005年度分)まで会費が支払われていることを示します。会費は年度単位で管理されています。「終身会員」「名誉会員」は表示の通りです。会費未納の方は、ラベルの右上に「願」と書かれています。事務局では、データの正確な入力に最善を尽くしておりますが、表示内容に疑義や質問のある方は事務局までお知らせください。

## SELDAA 常任委員 (2005年3月現在)

名誉会長 / 丹野 眞 (英語学科長)  
会 長 / 石川 雅 弥 (昭和40年卒)  
副会長・事務局長 / 池 沢 成 実 (昭和48年卒)  
副 会 長 / 大日方聖信 (昭和62年卒)  
会 計 / 東郷公徳 (昭和62年卒)  
会 報 / 佐藤誠一郎 (昭和53年卒)  
常任委員 / 飛弾 誠 (昭和53年卒)  
成瀬年子 (昭和48年卒)  
根本竜太郎 (平成15年卒)  
林めぐみ (平成13年卒)  
監 査 / 井坂由美子 (昭和47年卒)  
岩 村 玲 子 (昭和49年卒)